

2025年6月29日 礼拝説教要旨  
 ヨハネによる福音書講解説教42「渴きを癒す靈」  
 イザヤ12：1～3、ヨハネ7：37～39

「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた」（37節）この「祭り」は、少し前のところに「仮庵祭」（7：2）とありますから、この祭りを指しています。仮庵祭はイスラエルの民がエジプトを脱出して40年の荒野の旅を神さまに導かれ、養われたことを記念するお祭りです。この荒野の旅路で思い起こすエピソードの一つに、モーセが岩を打ってそこから水を出して人々の渴きを癒された話があります。イスラエルの民は飲み水がないのでモーセに詰め寄り文句を言いました。「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのか。わたしも子供たちも、家畜までも渴きで殺すためなのか」（出エジプト17：3）神さまはこの不平を聞かれて岩から水を出して渴きを癒されます。仮庵祭では、このことを再現するような場面がありました。それは祭司がシロアムの池に降りて行って、そこから黄金の水差しで水を汲み、祭壇に注ぎかけるというものです。その時にイザヤ書の御言葉「あなたたちは喜びのうちに救いの泉から水を飲む」（12：3）という歌が歌われたそうです。それは祭りの最終日に行われ、祭りが最高潮に達するような時だったでしょう。それが「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日」という言葉の背景にあります。

そのような祭りの絶頂、その歓喜の叫び声が飛び交うような中で、祭りの喧騒を吹き飛ばすように、それにイエスさまが大声で呼ばれるのです。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」（37節）考えてみると、祭りの最終日、人々は一週間たらふく食べて飲んでおそらくお腹もいっぱいだったことでしょう。喉が渴いているような人はだれもいない。でもその人々に向かってイエスさまは「渴いている人はわたしのところに来て飲みなさい」とおっしゃるのです。ですからその「渴き」は単なる喉の渴きではない。人間の最も深いところ、その内面の渴き、魂の渴きと申し上げてよいでしょう。それは飲んだり食べたりすることでは決して満たされない靈的な渴きです。わたしたちは、本当はそういう渴きを抱えています。けれどもそのことになかなか気づかないのです。

イエスさまがここで訴えておられる魂の渴きとは何でしょうか。それはわたしたちが失っているもの。失っているゆえに渴くもの。それは神さまとの生きた交わり、つながりです。人間は、神さまから命の息を吹き入れられて生きる者となったと聖書は伝えます（創世記2：7）。この「生きる」はただ呼吸をしている、食べたり飲んだりすることで維持される命ではなく、神さまから命の息を吹き入れられた部分、魂（ネフェシュ）において生きていることです。神さまとの命の交流のある部分です。本来、人間はその魂の部分から神さまとつながって生きていました。

ところが、人間は神さまとの約束を破り、罪を犯します。神さまとの交流を自ら絶ってしまいました。だから人間は根無し草のように渴き、ただ枯れていくだけになってしまったのです。その結果が今の世界の姿であり、それがわたしたちの日々の歩みに現れています。今日のイエスさまの言葉はどこかで聞いた響きがあります。それは第4章にありましたサマリアの女性の話です。「わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（4：14）この女性は夫を五人も取り替えても、それでも満たされない渴きがありました。それは愛の渴きです。なぜそんなにも結婚を繰り返したの

か。自分の中の愛だけで愛そうとしていたからです。自分の中のわずかな愛を振り絞るようにして夫を愛そうとしてきた。でもその愛もやがて尽きてしまう。その繰り返しだった。だからイエスさまは女性に「わたしが与える水を飲みなさい」と言われます。決して渴かない、永遠の愛を受けなさいと言われるのです。それは神さまにつながって、その生きた交わりの中でこそ受けることができます。

その交わりを回復するために神さまはイエスさまをくださいました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（3：16）独り子の命を与え尽くして、わたしたちをただひたすら愛し続けてくださるのです。ここで思い起こしていただきたいのが、イエスさまが十字架の上で「渴く」とおっしゃられたことです（19：28）。ヨハネ福音書が十字架上のイエスさまの最後の言葉として伝えるのがこの言葉です。「渴いている人は誰でも、わたしのところに来て飲みなさい」と言われたイエスさまは、最後にご自身が渴かれる。ご自身の命を与え尽くし、愛を与え尽くして、わたしたちの中に命の泉をお造りになられるのです。聖霊によってイエスさまに導かれ、イエスさまと結ばれる人は、神さまとの生きた交わりの中に置かれ、その人が命の泉、愛の泉となって誰かのために仕え続ける、誰かを愛し続けることができるようになります。それは泉のように、湧き水が渾々と湧き出て大地を潤すように、愛が溢れ出て、周囲に及んでいくことをイメージすることができます。わたしたちは周囲の人たちを暗く、嫌な思いにさせるのではない。イエスさまの愛を醸し出す存在です。尽きない愛をもって愛し続ける。たとえ愛されなくても、わたしは愛し続ける。赦し続ける。神さまとの生きた交わりは、そのような愛を可能にします。

先週の日曜日は、礼拝後に宮崎中部教会にまいりまして、牧師の就任式に出席しました。とても良い就任式でした。お祝いに集まった人たちで宮崎中部教会の小さい礼拝堂がいっぱいになりました。着任された小堀先生がせっかくエアコンで礼拝堂を冷やしてくださいましたのに、窓を開けています。賛美の歌が街の人たちに聞こえるようにと言われました。そのとおり賛美の歌声が溢れる、愛が溢れ出るような時でした。宮崎市内には大淀川と言って大きな川が流れています。その川を渡って市街地に入るのですが、川幅の広いとても大きな川です。でもその源流はおそらく小さな泉なのでしょう。でもその泉が雄大な川の流れを作っています。わたしたちは小さく弱い存在ですが、イエスさまに結ばれ、決して尽きることのない愛の泉をその内に持っています。その源泉を持つのと持たないのでは大きな違いがあります。イエスさまが自ら渴かれ、命を与え尽くして、わたしたちの中にその愛の源泉を造ってくださいました。その生きた水は必ずわたしたちの中から流れ出て周囲を潤すものとなるでしょう。「わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」  
(38節)

天の父よ。あなたに結ばれていなければ、わたしらちは愛することも赦すこともできません。だからこそイエスさまが十字架でその命を捧げてくださいました。ご自身がその愛を与え尽くし、渴かれることで、わたしたちの中に愛の泉を造ってくださいました。そこにわたしたちの愛の源があることを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。